

# 日本語のリズムと平易性

増井典夫

## The Rhythm and Easiness of Japanese Language

Norio Masui

### 1. はじめに

以前からある考え方の一つに「日本語は世界一難しい言語だ」というものがある。「日本は地形的にも孤立しており、その結果、日本語は言語系統論的に見ても、類似のもののない孤立した言語となっている。そのため、日本語は他の言語には見られない種々の特徴を持つ特異な言語となった」云々というような所から発展させた考え方かと思われるが、言語学が専門でない人々の間では意外に根強い考え方のものである。

日本語の研究分野は「音声・音韻、文字・表記、文法、語彙」というように大別されて行われているが、日本語の難しさは、主に「文法」を取り上げて唱えられることが多いようである。

一方、言語学者の間では、「日本語は他の種々の言語と同様、ありふれた言語の一つであって、特殊なものではない」との見方が一般的なようである。文法事項を取り上げて分析した例として、角田太作氏の著作『世界の言語と日本語』を見てみると、

日本語特殊説も英語標準説も適切ではない。以下の項目では、日本語も英語も普通の言語である：(A)主語、目的語、動詞の語順、(B)助動詞と本動詞の語順、(C)格組織、(D)他動性、(E)二項述語分類、(F)所有傾斜。

日本語は、関係節と名詞の語順に関しては、小数派に属す。しかし、珍しい言語というほどのものではない。私が今まで調べた限りでは、日本語に関することで、日本語にしか無いという特徴は無い。一歩下がって、世界的にみて例が少ないという特徴も無い。

しかし、英語に関しては、(G)一般疑問文を作る時に主語と動詞を倒置する現象は世界的に見ても珍しい。(H)しかも、その時、助動詞の助けを借りるという特徴は英語にしか無い。(I)しかも、万能助動詞 do は他の言語に見あたらない、珍しいものである。(J)文法機能が強い、主語が強い、仮主語がある、などという点で、珍しい。特に、主語が非常に強いという点で、

英語は世界的にも類例の無い、希な言語であるかも知れない。

英語はこれらの点では実に特殊な言語である。決して、人間言語の中で代表的な・標準的な言語ではない。  
(235 P, くろしお出版, 1991年4月)

のように述べられている。英語標準説に基づいてなされてきた日本の語学教育において、特に G~J の項目が日本語特殊説につながるものだったわけだが、インド・ヨーロッパ語族以外の外国語をも視野に入れて考えれば、英語標準説も日本語特殊説も根拠があいまいなものに思えてくるのではないか。<sup>1)</sup>

また、「日本語には敬語があるから難しい」ということも昔からよく言われてきたことである。確かに敬語表現は難しい。しかし、敬語表現の難しさは人間関係の複雑さ・難しさによる面も多いと思われ、言語の構造的な難しさにつなげることはどうかと思われる。また、敬語は日本語だけにあるから難しいのではない。例えば、朝鮮語は日本語以上に複雑な敬語体系を持つと言われるし、中国語その他のアジア系の言語は軒並み複雑な敬語の要素を持つとされる。

このように見て行くと「日本語は世界一難しい」という根拠は怪しいもののように思われる。

## 2. 音節と拍

さて、日本語を考える上では、表現単位として「音節と拍」について整理しておく必要があると思われる。

今、手元にある国語概論のテキストとして、和泉書院の『国語概説』（佐伯哲夫・山内洋一郎編）を見ると、「音節 (syllable)」として、

語音はさらに音節という小単位に分割できる。音節は仮名一文字で表され、じっさいに発音可能な最小単位である。古来、日本人は音節を発音上の基本的な単位と意識してきた。そのことは、「万葉仮名」以来、「仮名」という音節文字のシステムが生まれ、それが現代に至るまで連綿と行われてきたことにも明らかである。  
(同書, 12P)

のように記されている。しかし、この記述だけでは、英語の音節と日本語の音節とを比較して考える時にはわかりにくい。

例えば、カタカナ語のスプリングという語は四音節と数えられるが、となると「原語の spring はなぜ一音節なのか」という疑問が残るのではないか。その疑問に対しては、「音節とは中に母音を一つ、必ず含んだ形で成り立っているものである」という説明が必要になってくる。spring は母音を一つしか含まないが、スプリングはローマ字書きすると supuringu で、母音を四つ含むからといえばよい。

ところで、日本語の実際の基本単位は音節ではなく拍と考えるべきである。「スプリングは

四つの部分から成り立っている」とするより「五つの部分から成り立っている」とする方が大多数の日本人にはおさまりがいいであろう。

先の『国語概説』の記述を見ると、

なお、音節と密接な関連にある「拍」(mora)は、音韻的長さの単位である。ほとんどの音節について1シラブル=1モーラの長さに相当するが、促音・撥音・長音は先行音と一体となって一音節を成す。  
(同書12P)

となっている。この音節と拍の違いを把握していないと大変おかしな記述が生まれたりする。

例えば、金田一春彦氏の『日本語』<sup>2)</sup>の記述である。氏は英米人にうまく日本語が教えられないと嘆いた上で、次のように述べている。

日本人は逆に外国語の拍を誤解する。「犬」を英語でドッグだと聞くと、これはド・ッ・グという三拍のように思ってしまう。ところが、イギリス人にはドッグは全体が一拍なのだ。  
(同書、上89P)

英語では「拍」は重んじられない。(もっとも、イギリス人であれ、日本人であれ、カタカナ語の「ドッグ」ならば三拍である)。一方、ドッグ(doggu)は二音節であり、dogは一音節である。(日本語では「音節」より「拍」が大きな役割を果たす)。この程度のことが理解できていないようでは英米人に日本語をうまく教えられないのも無理はないと思われる。

### 3. 五七、七五の韻律について

さて、日本語における、最も伝統的かつ基本的な韻律とされるのは七五調である。短歌や俳句のみならず、標語類のたぐいにも「五・七・五」は頻繁に登場する。

この韻律がなぜ、四や六や八でなく五及び七で構成されるのかについては、井上ひさし氏が興味深い説を展開している。

ヤマ、カワ、ウミ、ソラ、トリ、ウオ、イネ、ハナ、フク、カネなど、日本語の基本単語には二音節のものが多く、一方、これらの二音節のことはの上にかぶせられる枕詞は圧倒的に五音である。すなわち合わせて七音。

他方、二音節のことはが動詞群(一音が多い)で繋がれ、[2・1・2]、あるいは[2・2・1]で、五音となる。

こうして七音と五音とが日本語の基本の韻律となった。

(『私家版日本語文法』206P、昭和五十六年三月、新潮社)

七五調を、書き言葉の場合に限定して考えれば、上記の説はかなりの説得力を持つように思われる。

しかし、井上氏は先の記述に続けて次のようにも書いている。

彼の怪投手江川卓選手がマウンドに立つと観客席の一部から野次が飛ぶ。筆者が耳にしたもののうちでもっともえげつない野次は、

「江川ア、刑務所へ行け、このばかやろう」

というものだったが、これには韻律がない。ごく平凡な野次、

「引っ込め、江川」

「くたばれ、江川」

「民主主義の敵、江川を粉碎しろ」

なども、観客が個々で発語する間にはなんの韻律も持たない。ところが江川が打たれはじめ、観客席が沸き出すと、後楽園球場では三塁・左翼側から、他球場では一塁・右翼側から、

「人間の屑、江川」

「帰れ、帰れ、江川」

「倒せ、倒せ、江川」

というシュプレヒコールが自然発生する。文字面からはおわかりにならないだろうが、このときの複数の声には明らかに韻律がある。注意深く聞くと、大抵はこうである。

「にん・げん・のく・ず／えー・がー・わッ」

「かえ・れッ／かえ・れッ／えー・がー・わッ」

「たお・せッ／たお・せッ／えー・がー・わッ」

共通点は、日本人で、野球見物に來ただけ、あとは千差万別でんでんばらばらの観客たちが、事前の打合せもなく、調子をつけ、声をそろえて野次るとなると、音はふたつずつの塊を形成し、ひとりで七拍になってしまう。(同206P～207P)

日本人が単数で、また複数で声をあげ調子をつければ、音は自然に二音ずつにかたまって、やがて五七、七五の調子になるのだ。(同212P)

「音は自然に二音ずつにかたまる」という見解は妥当なものだろう。しかし、上記の野次の例など、七拍と数えるのが一番妥当な数え方であろうか。そもそも発話時の場合、七五調を七拍五拍の調子と捉えることが妥当なのだろうか。

## 4. 日本語四拍子説

さて、俳句における字余りの例として、「目には青葉 山ほととぎす はつがつお」という句がよく取り上げられる。そして、「目には青葉」の六音の部分が字余りで調子はずすので、「目に青葉」としばしば変えて言うってしまうのだと説明される。

一方、標語などで調子よくしようとする時にも「5・7・5」に合わせることになる。その際に「5・7・5」からはずれると、調子はずれになるように思われるが、例えば「赤信号みんなで渡れば こわくない」の場合、調子はずれのように感じないのに、数えてみると「6・8・5」になっている。この、「字余りなのに調子はずれでない」理由は何だろうか。

つまり、「調子のよさを決めているのは5・7・5かどうかだけではない」<sup>3)</sup>からなのである。

ここで、俳句を読む時の「間」について考えてみよう。例えば「五月雨を 集めてはやし最上川」の場合、「五月雨を」のあとで少し間を取るだろう。この、間の取り方を含めた読みのリズムをリズム譜で示すと次のようになるだろう。

$$\frac{4}{4} \begin{array}{c} \text{さ} \text{み} \text{だ} \text{れ} \text{を} \\ \text{あ} \text{つ} \text{め} \text{て} \text{は} \text{や} \text{し} \\ \text{も} \text{が} \text{み} \text{が} \text{わ} \end{array} \parallel$$

一方、「柿食えば 鐘が鳴るなり 法隆寺」の場合は次のようになる。

$$\frac{4}{4} \begin{array}{c} \text{か} \text{き} \text{く} \text{え} \text{ば} \\ \text{か} \text{ね} \text{が} \text{な} \text{る} \text{なり} \\ \text{ほ} \text{う} \text{り} \text{ゅう} \text{じ} \end{array} \parallel$$

このように、二拍をひとまとめにして一拍子と数え、うまく間を取りながらことばを四拍子にのせていると思われる。なお、「柿食えば」の場合、「鐘が鳴るなり」の部分の次のようにしては不自然になる。

$$\frac{4}{4} \begin{array}{c} \text{か} \text{ね} \text{が} \text{な} \text{る} \text{なり} \end{array} \mid \text{ (「かねがな」+「るなり○」)}$$

また、「集めてはやし」を次のようにしては、やっぱり不自然である。

$$\frac{4}{4} \text{○あ} \text{つ} \text{め} \text{て} \text{は} \text{や} \text{し} \mid \text{ (「○あつめ」+「てはやし」)}$$

このように、「集めてはやし」は「あつめて」+「はやし○」と、「鐘が鳴るなり」は「○かねが」+「なるなり」というようにそれぞれ二拍子（四拍）にのるようにととのえてリズムをとっているわけである。

さて、「目には青葉」の句の場合と、「赤信号」の場合は、リズム譜で示すと次のようになる。

めにはあおば やまほととぎす はつがっお

あかしんごう みんなでわたれば こわくない

「めにはあおば」「あかしんごう」共に六拍だが、拍子でみると、「あか・しん・ごう」の方は特に問題ないのに対し、「めにはあおば」の方は、「めに・はあ (waa)・おば」と区切ってみると、意味の切れ目とずれ、発音もしにくく、大変不自然なことがわかる。そのため、つつい「めに・あお・ば」と拍子に意味の切れ目を合わせ、言いやすくするのであろう。逆に言えば、拍子と言葉の切れ目が合っていれば、字余りであっても（八拍以内であれば）それほど問題にはされないのではないか。

もう一つ、井上氏が取り上げていた、野次や応援の場合を見てみよう。

例えば、「倒せ、倒せ、江川」の場合は、リズム譜では次のようになる。

たおせ たおせ えーがーわっ

やはり四拍子にのせているのである。

また、応援の「三三七拍子」も実際は四拍子（八は四・四に分けられる）なのである。

このように、日本語で調子よくしようとすると、四拍子のリズムに落ち着くことになるのである。

## 5. 日本語の難しさとは

日本語のリズムは最も平凡な四拍子に落ち着きがちなことを見てきた。このことは決して日本語特殊説につながるものではないだろう。

外国人に対する日本語教育において、「日本語の発音の難しさ」と考えられているものの中には、日本人自身の勉強不足によるものも、いろいろあると思われる。例えば、「参拝」という言葉が「サヌパイ」のような発音になる音に、「さんばい」の「ン」の発音は「n」ですよ

と言っているようでは日本語らしい発音に直すことはできない。「ん」の次の音がp, b, mの場合は「ん」はm音になる。このようなことがある。

一方、第一節で触れたもののほかに、日本語の文法に関する事項で、特徴と思われるものに用言の活用の規則性といったものが挙げられる。英語の場合と比較すると、用言に関して言えば、日本語の方がはるかにやさしいようにも思われる。

いろいろ整理して考えると、結局、「日本語の難しさ」は「表記の難しさ」、さらに言えば「漢字の難しさ」に尽きるように思われる。

日本語における正書法の必要性は、いろいろ言われているものの、なかなか難しい問題である。漢字が難しいからと言って、漢字の全廃は不可能であろうが、有効な試みの一つとして「和語のかながき」がある。これは、野村雅昭氏などが提唱しているもので<sup>4)</sup>、正書法はこの方向で成立をめざすべきものとおもわれるが、実際にはワープロなどをつかうと、ついつい漢字をつかいすぎがちになる。わたし自身、この点をどうすべきか、まだまだかんがえていけないとおもっているところである。

#### 注

- 1) 英語と日本語では、語順など、違うところも多いが、だからと言って、日本語が特殊だとは言えないということである。
- 2) 岩波新書、1988年1月。
- 3) 上山あゆみ『はじめての人の言語学』（1991年1月、くろしお出版）。このほか城生佰太郎氏などにも同様の記述がある。
- 4) 『漢字の未来』（1988年7月、筑摩書房）など。